



2016年10月 No.3

できたしこルーテル3

日本福音ルーテル教会九州教区熊本地震救援対策本部ニュース

ルーテル教会の専従ボランティア大山直美さん 被災地障害者支援センターでの働き

大山さんに聞いてみた

■この度、ルーテル教会の被災者支援の活動の一環として、被災地障害者センターくまもとに派遣されることになりましたが、どういう経緯だったのでしょうか？

ーわたしの家族は、健軍教会の裏手のアパートに住んでいたのですが、今まで特に教会と関係があったわけではありませんでした。けれども地震のためにアパートが住めなくなり、健軍教会でしばらく避難生活をさせていただきました。視覚障がい者の



センター事務局長の東弁護士と大山直美さん息子が最近、教会の礼拝に出席させてもらうようになり、そこで教会関係の障がい者施設の求人情報を聞いてきてくれたのです。ちょうど、障がい者関係の求人を探していたので息子に確認して貰ったところ、その施設のことだけでなく、できたしこルーテルが人を探しておられるという話しをお聞きしたのです。ずっと考えてきた障がい者関係の働きを探していたところだったので、お話しをいただいて大きな縁を感じました。センターのボランティアは、福祉関係の勤務経験者か障がい者の家族ということで、わたしとしては、「棚からぼた餅」とでもいうような嬉しいお話でした。

■どんな働きをしておられるのですか？

ーセンターには、週5日間通わせていただいています。はじめは現場に出る仕事から始まって、いまは事務所での電話対応など、事務局の働きが中心です。初めて来られたボランティアの方への対応、依頼者の

ケース記録のまとめの他、必要に応じて現場に出ることもあります。引っ越しの片付けやアパートなどの物件探し、行政の証明書申請に同行したりもします。ボランティアの方々が働きやすいような声かけなど、わたしなりのおもてなしもしていますつもりです。マニュアルがある仕事ではないので、臨機応変さ問われます。

■地震が起きたとき、障がいのある方には、どんな困難があったのでしょうか？

ー障がいの種類や重さにもよると思いますが、震災が起こると障がい者は後回しにされるということがわかりました。例えば、避難所での支援物資の配給でも、並ぶことができる人の人数分しかもらえず、人と一緒に並べない精神の障がいがある人など、あんパンとバナナ1本を5人で食べた、という話も聞きました。仮設住宅も、スロープがあっても、家具などを配置すると屋内は車イスではとても生活が出来ないため、実際には入居できなかった、など。また、パニック障害のあるご家庭は、避難所ではまわりに迷惑がかかるからと、人のいない赤紙(危険家屋)判定された公民館ですごされた、という話もありました。

■どんな思いで働いておられますか？

ーわたしには、専門的な知識はありませんが、お手伝いさせていただく方、またボランティアの方々に対しても、「あなたに会えてよかった」、と思っただけのようにと、お一人おひとりと寄り添うような思いで、働かせていただいています。この仕事にやりがいを感じています。地震がなければ、今のわたしはありませぬし、こういう言い方は不謹慎かも知れませんが、地震も悪いことばかりではない、と思っています。ーどうも、ありがとうございました。

ボランティアに参加して

廣田正勝(甘木教会)

10月4日から3日間震災地熊本への支援活

動に参加した。1日目は少し南下した益城郡である。熊本市内を離れるにしたがって景色は一変する。あちこちで重機が稼働し家屋を解体している。倒壊しかかっている家屋が無数に目に付く。

ナビ頼りに到着した支援する家の前に、布団類、衣類、電化製品、ガラス類、家具等が山積みされている。依頼者との綿密な打ち合わせの中で、持ち出しまでの作業が進められてきた。これを、1.5tトラックへ積込む作業は容易ではない。水を含んでずっしりと重い。今日の小ぶりの雨ではなく、全壊家屋の雨漏りによって布団に浸み込み重量を増し繊維はちぎれ形を成さない。これを分類して積み込まないと、集積場やごみ焼却場での荷下ろしが大変なのだ。

個人が持ち込む多様な廃棄物を積むトラックのチェックは、ひととき厳しいようだ。布団類は良いが衣類はダメだという。カーテンや毛布と衣類は変わらないと抗議すると同意はするが赦してくれない。持ち帰らざるを得ない。

思い通りに意思表示ができない。思いが伝わらない。自由な行動ができない。自治会や行政との意思疎通が不自由なために、落ち着きを取り戻し始めた震災地熊本にあって、ハンディを持った方々の生活復興は大きく立ち遅れている。「被災地障害者センターくまもと」は、精神的な障害、知的障害、身体障害の方々の復興相談・支援に対応している。

罹災証明がなければ無料で廃棄することができないと理解させるために、時間をかけて丁寧に電話機に語り掛けるスタッフの努力に頭が下がる。ボランティア参加者は遠距離が多い。しかも、2週間とか10日間滞在という。福岡の私は近いうえに3日という最も短期間で、肩身が狭い感じだ。横浜、京都、大阪、滋賀、敦賀、名古屋と、各地の障がい者施設団体から派遣されている方が多かった。

熊本 短 信

熊本ライトハウスー熊本市指定の福祉避難所として障がい者のご家庭を受け入れてきました。いまでもひと世帯の避難が続いています。ご支援感謝です。九州学院ー建物関係に大きな被害。ブラウンチャペルは行政の補助対象外ということで教会の支援を必要としています。学生もボランティアに参加しました。ルーテル学院中高ー「感恩奉仕」の心で生徒・校長・教職員・教会からのボランティアが西原村仮設住宅での花壇づくりをスタート。季節ごとに続けていきます。チャイルドファンドジャパン(CFJ)ー熊本のルーテル幼保連は、CFJの親と子どもの心のケア小冊子作成に協力。662園64000名の保護者に配布されました。

■二次募金は、被害の大きかった九州学院のブラウンチャペル、九州ルーテル学院阿蘇山荘等のために行います。近く JELC 事務局から募金の呼びかけがあります。九州教区事務所 [〒812-0028福岡市博多区須崎町3-9 Tel.092-281-4204 kyushu-k@jelc.or.jp] 編集：小泉基 発行：岩切雄太